

「モンゴル帝国と朝鮮半島」

2019年度インターゼミ アジア・ダイナミズム班

- 学部生 : 杉浦左京、藤山拓海、和泉遼、押見正明、小出幹、柳沢悠介
- 大学院生 : 宮北靖也、半田敏章、越田辰宏、野々宮正晃、浅賀誠、
小西令枝、北山智子
- 卒業生・修了生 : 光永和弘、塚原啓弘、和泉昌宏、三好瑛大
- 指導教員 : 金美德、水盛涼一、小林昭菜

論文目次

はじめに

第1章 高麗の政治・経済史

第1節 高麗の国家運営

第2節 高麗の経済

第3節 高麗王朝の実態

第4節 高麗王朝と儒教

第5節 現代の朝鮮半島と日本

第2章 モンゴル帝国時代(元)の中国

第1節 モンゴル帝国のアイデンティティ

第2節 元朝の官僚

第3節 元朝滅亡と白蓮教

第4節 モンゴル帝国の都・北京

第5節 少数民族モンゴル族による漢民族支配

第3章 モンゴル帝国以降(明・清・現代)の中国

第1節 大清帝国における少数民族満州族の漢民族支配

第2節 少数民族による漢民族支配～モンゴル帝国と大清帝国の共通点～

第3節 漢民族による現代中国の多様な中華民族統治

第4節 少数民族による統治と現代日本企業

第5節 モンゴル帝国滅亡後の北東アジア

第6節 清(満州人)によるモンゴル統治

第7節 元朝滅亡後の北元時代モンゴルと中国の関係

第8節 モンゴル帝国の統治と一帯一路政策

結論

残された課題

最後に

フィールドワーク報告

参考文献

問題意識

- 1 高麗がモンゴル帝国の傘下に置かれても国が保てたのは何故なのか。
- 2 小国(高麗)が大国(モンゴル帝国)に相對し、生き延びるためにはどのような戦略が必要なのか。
- 3 大国に囲まれ生き抜いてきた高麗のアイデンティティとは、どのようなものか。
- 4 グローバル社会において朝鮮半島をどのように理解すべきか。
- 5 漢民族支配の中国と、漢民族以外(モンゴル・満州族)による支配の中国との違いはあるか。

1. モンゴル帝国史(1206-1271)

- 元(1271-1368)

- 北元(1368-1632) ▪ 清(1632-1911)

11世紀～13世紀のアジア地図

13世紀のアジア～モンゴル帝国



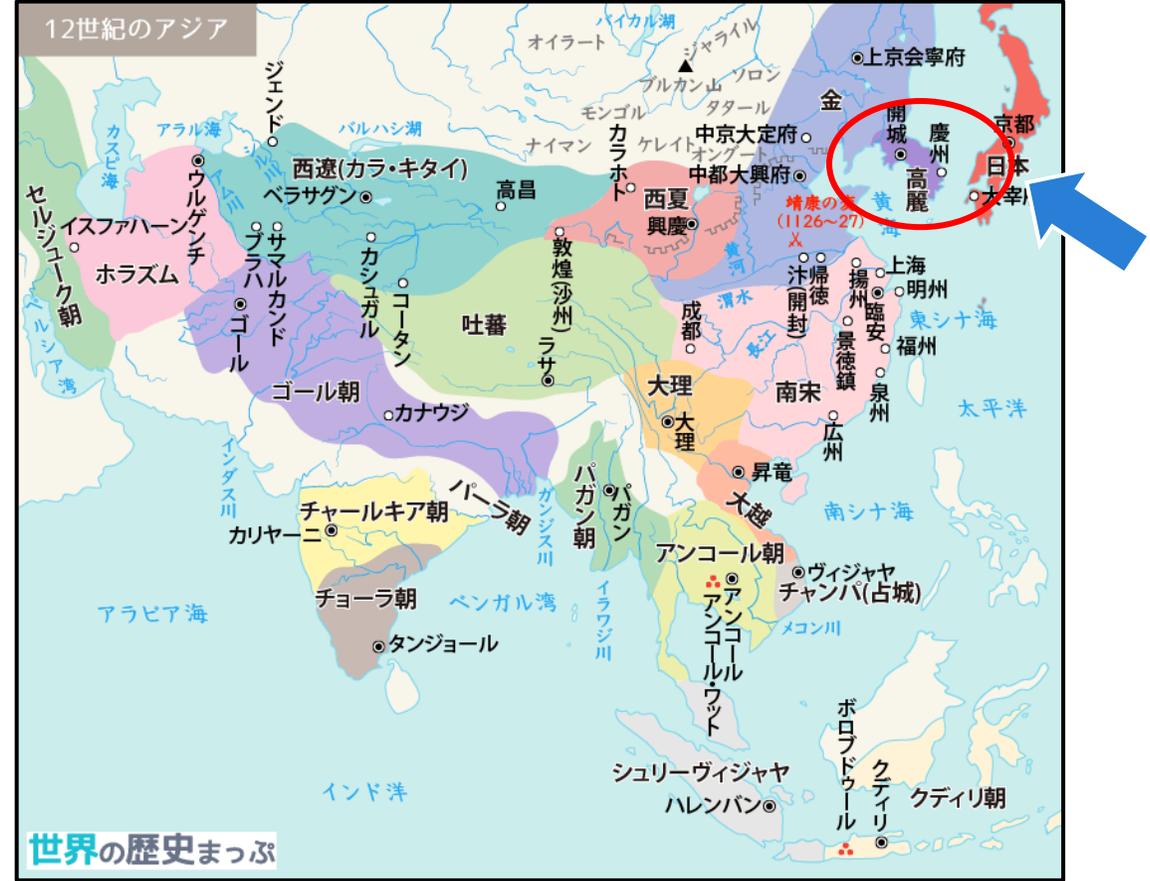
出展:世界の歴史マップ

11世紀～13世紀のアジア地図

11世紀のアジア



12世紀のアジア



出展:世界の歴史マップ

2017年・2018年 論文の結論

2017年

モンゴル帝国のユーラシア興隆史 107ページ

モンゴル帝国が現代にもたらすもの

1. 「経済連携」による「平和と安定」
2. リーダー(チンギス・カーン)の「思想」と「視野」:イル(仲間)になる思想・多様性の受容

2018年

モンゴル帝国の興隆と衰退 244ページ

新たな発見

1. モンゴル帝国は現代にまで「ソフト面」を遺した
2. モンゴル族はアイデンティティが薄いから世界統一できた

得られた示唆

1. 歴史は繰り返す:ゆるやかな統治の限界点
2. 拡大から縮小過程の生き方:成長だけではない生き方
3. リーダーの資質:資質とガバナンスの低下

朝鮮半島とモンゴル帝国・中国

残された課題を研究するために、

モンゴル帝国、元と深い関係を持つ高麗にフォーカスを当てる



① 中国の「属国」であり続けた半島の歴史：切り離せない隣国

② モンゴルの血：クビライ・カーンの娘に始まるモンゴル皇族と高麗王家の通婚

③ 明を選ぶかモンゴル(北元)を選ぶか：明を選んだ高麗。モンゴルを選んでいたら…

2. 高麗(918年～1392年)と モンゴル帝国

通婚関係により**モンゴル王族の一員**となった

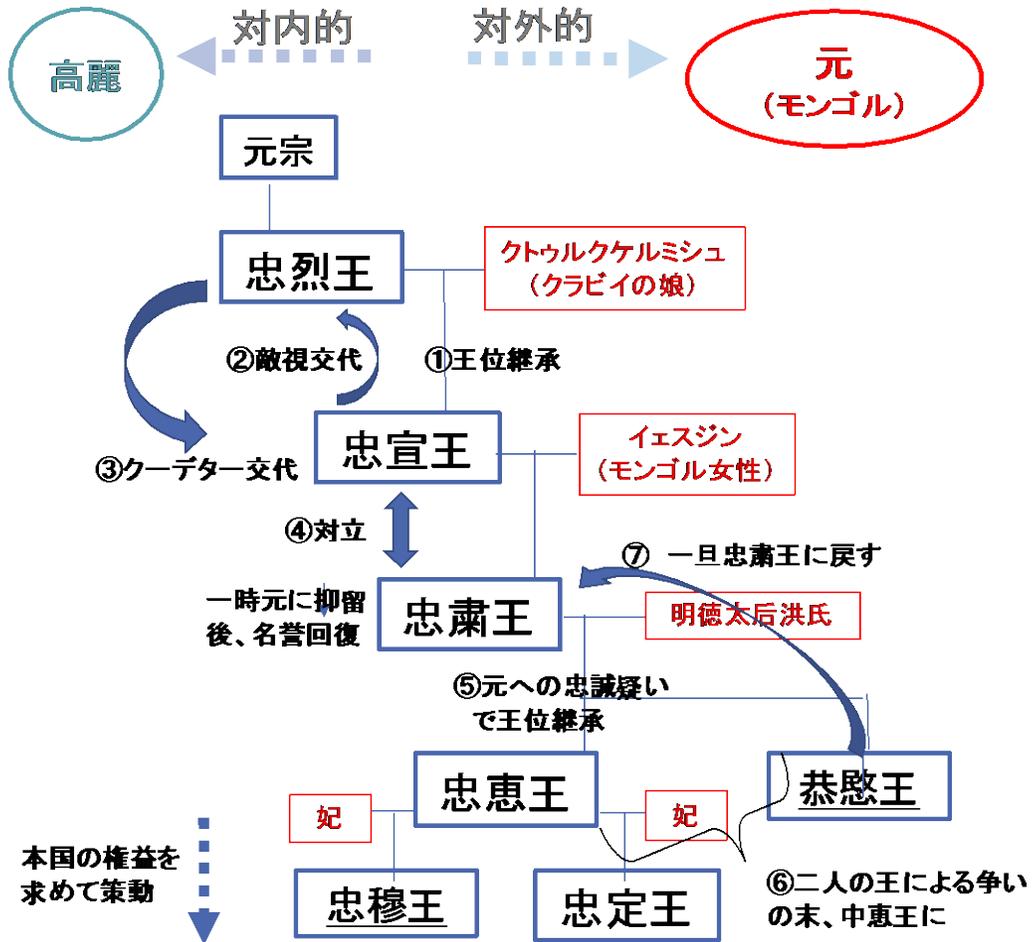
日本戦略の中で**自らの存在を確立**し、
支配されすぎない、主体的な立場を勝ち取った

大国に入る場合でも、自らのアイデンティティを維持するための戦略が必要で、言いなりになればよいわけではない。

内部闘争により体制が弱体化

高麗の知恵と失敗

高麗王家とモンゴル皇族の通婚関係と内部闘争



高麗の知恵

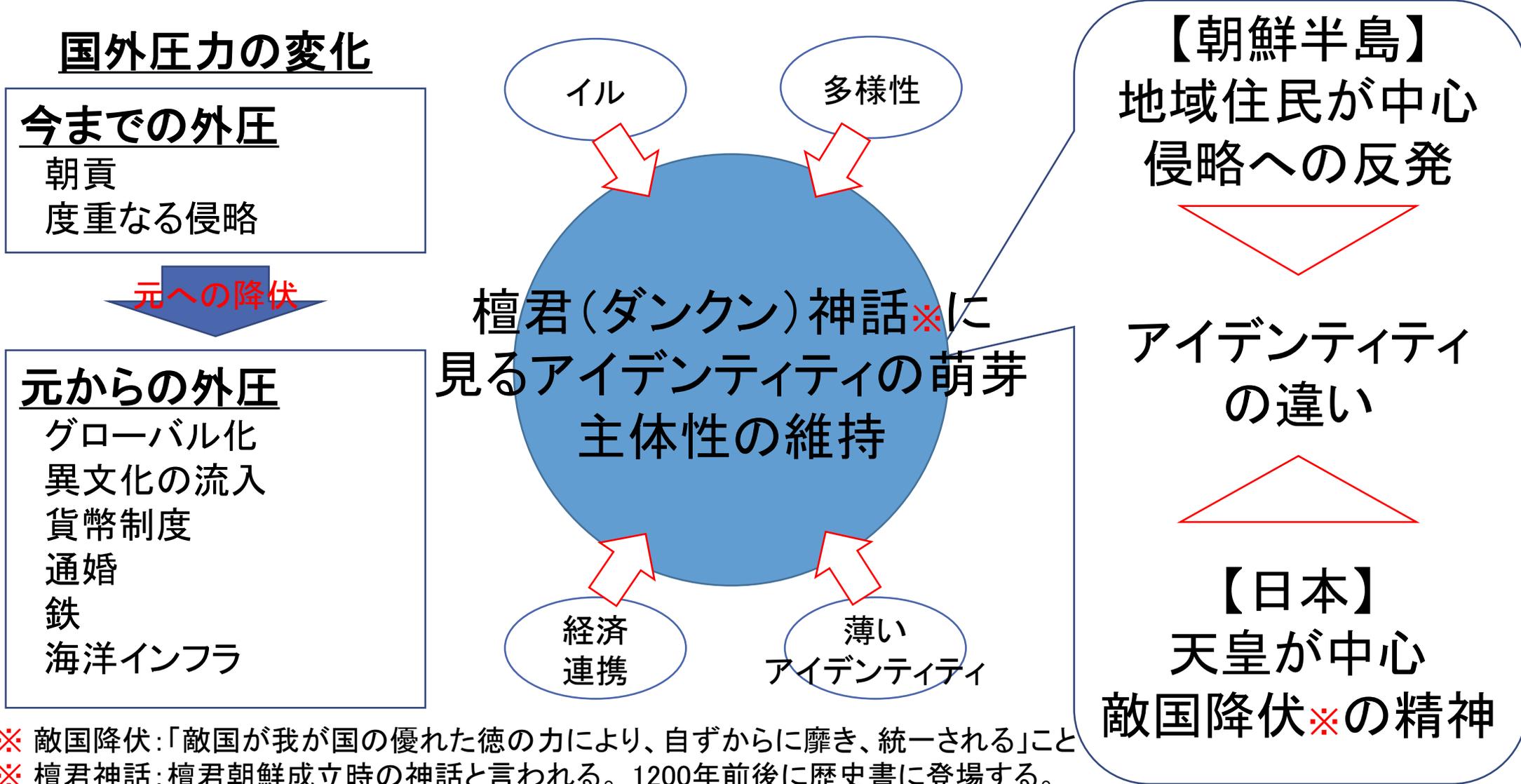
1. モンゴル(元)皇族との**通婚関係により元の官職**を得る
2. 対日警戒網を統括する役割を担うことで元と一体となりつつ**主体性の維持**
3. モンゴルの定例**要求**(人質・物資・軍事協力等)が**軽減**され、**王制維持**の現実化

高麗の失敗

内部闘争により、**体制の弱体化**へ

個々の欲や内向的な組織は持続的な体制を築けない。事が始まる時や拡大していく段階では、**カリスマ要素のある個人技も必要**。組織の持続的安定のためには、**多様な考え方や第3者の目を入れることが必要不可欠**

変革によるアイデンティティの確立



※ 敵国降伏: 「敵国が我が国の優れた徳の力により、自ずから靡き、統一される」こと

※ 檀君神話: 檀君朝鮮成立時の神話と言われる。1200年前後に歴史書に登場する。

モンゴル帝国時代の中国(元)・モンゴル帝国以降の中国(明・清・現代) ～少数民族による漢民族支配の共通点～

モンゴル帝国 13世紀~14世紀



アメ 漢民族の制度や文化を尊重。
漢民族の優秀な人材を登用。

ムチ モンゴル人支配層を頂点としたヒエラルキー。
モンゴル第一主義で漢民族を抑圧＝中国史観

共通点

1. 漢民族の制度・文化を尊重しながらも同化しない「アメとムチのバランス」
2. 「多数派民族を統治する経験値」を元朝・清朝以前からもっていた
3. モンゴル人・満州人が支配層であることを示す「文字」(パスパ文字・満州文字)

大清帝国 17世紀~20世紀



アメ 漢民族への融和策
・科挙制度 ・満漢併用制

ムチ 漢民族への強硬策(粛清・思想統制)
・辮髪 ・文字の獄 ・禁書

モンゴル帝国以降の中国(明・清・現代)

～現代中国の多民族(56民族)支配・現代企業グループ経営～

中華人民共和国 20世紀～

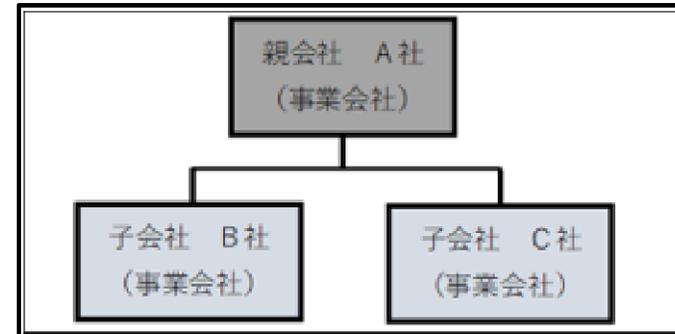


モンゴル帝国・大清帝国以外、歴代中国王朝は「漢民族による儒教・漢字文化圏」を越えたことはない⇒少数民族だからこそ、しなやかな統治の成果

現代中国は、漢民族(多数派)による「漢民族による儒教・漢字文化圏」を越えた支配⇒歴史上なかった・ウイグル、チベット問題は多様性の受容と対極

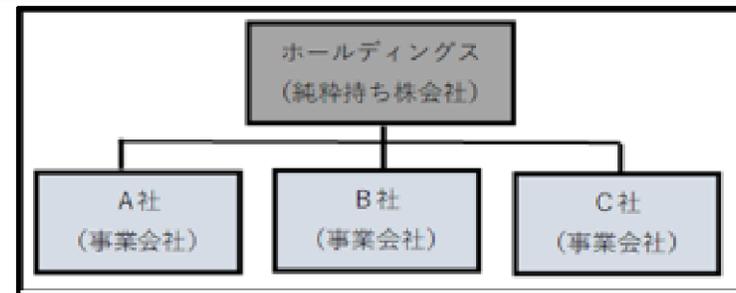
企業のグループ経営とモンゴル帝国・大清帝国

事業会社である親会社と子会社

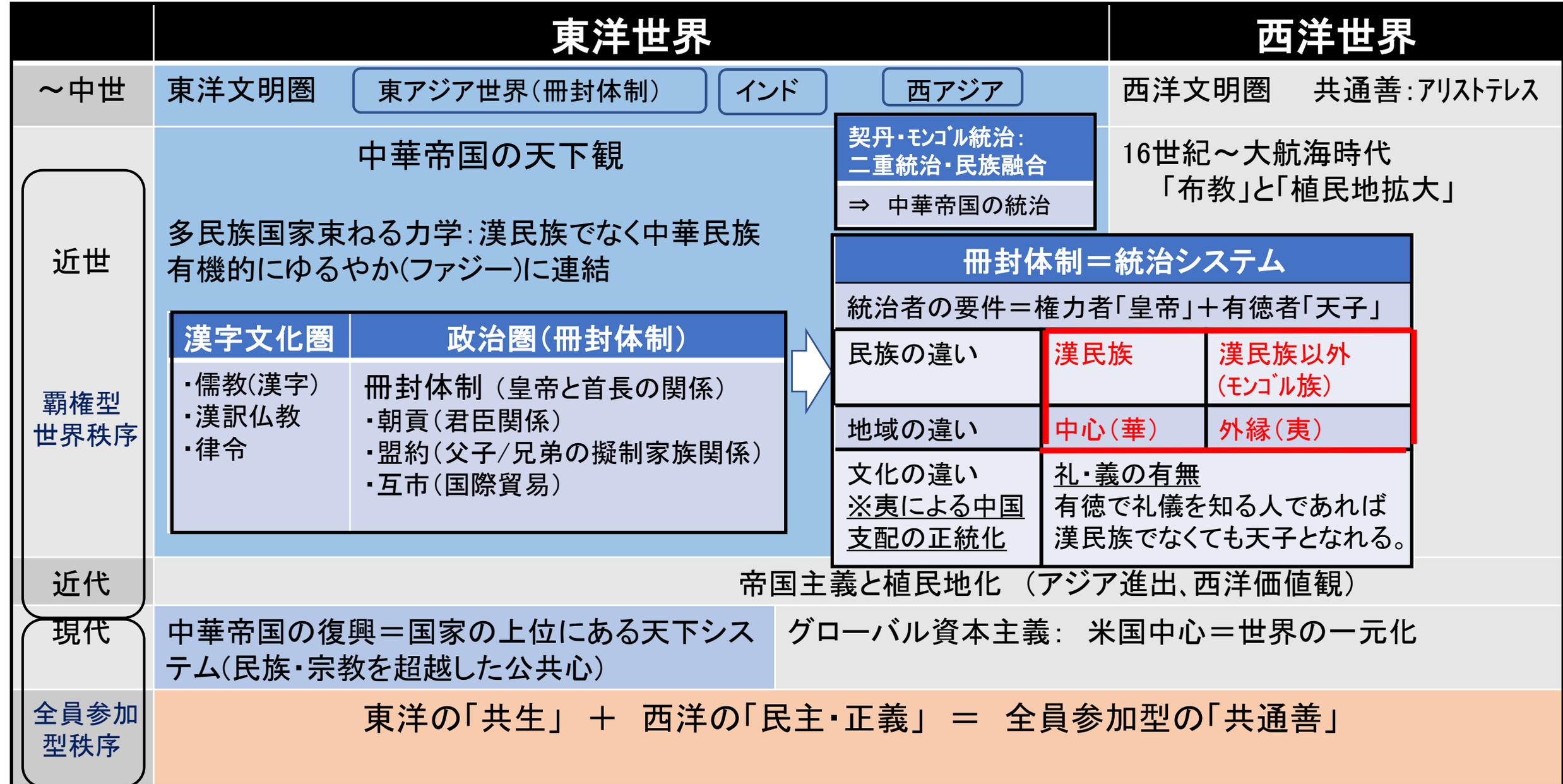


大が小を支配・親が実権 現代中国型

持ち株会社によるグループ経営



グループ経営と個別事業の分離「集権と分権」「遠心力と求心力」のコントロール
モンゴル帝国・大清帝国型



関係国の現行政治制度

国名	政体	制度	国家元首	国会・議会
フランス	共和制	半大統領制	大統領	二院制
韓国	共和制	半大統領制	大統領	一院制
ドイツ	連邦共和制	議院内閣制	大統領	二院制
アメリカ	連邦共和制	大統領制	大統領	二院制

フランスと朝鮮(韓国)との政体比較

	フランス	朝鮮(韓国)
属国時代	<p>対ナチス・ドイツ支配下の「ヴィシー政府」 [1940-1944年]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・元首の三権統治: ファシズム体制 ・積極的協力: ユダヤ人迫害、日和見主義 ・役人社会 → 次政権でも地位確保 	<p>元朝支配下の「高麗」[918-1380年] 清朝支配下の「李氏朝鮮」[1392-1910年]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事大主義(小が大に付き従う)、日和見主義 ・小中華思想 ・役人社会[兩班]: 支配者階級
現行体制	<p>共和制: 第五共和制</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大統領の権限強化: ポナパルティズム気質 ・議会の権限縮小 ・役人社会: 官僚政治の国家 	<p>共和制: 第六共和制</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大統領に大きな権限 ・役人社会: 権力と腐敗

○ **支配国への積極的服従・協力** (歴史の暗部)、事大主義、日和見主義

→ 国内政治の基盤強化目的: 忠烈王[在位1274-1308]、モンゴルに日本侵攻を働きかけ『高麗史』

○ **制度・経済政策は時代を超えて運用**

→ 役人社会、戦後フランス共和制は、ナチス下のヴィシー政権時代の制度・経済政策を形変えて運用

3. フィールドワーク

フィールドワーク報告

<スケジュール>

- 8月26日(月)～8月28日(水)
 - 8月26日(月) 元寇資料館、筥崎宮
 - 8月27日(火) 福岡市博物館、九州大学伊都キャンパス講義
 - 8月28日(水) 九州国立博物館

<参加者(敬称略)>

- 合計 15人
- 学部生: 杉浦、和泉(遼)、小出、柳沢、押見
- 院生: 宮北、半田、浅賀、野々宮
- OB: 光永、和泉(昌)、塚原
- 講師: 金先生、水盛先生、バートル先生

<所感>

全日程を通して天候には恵まれず、最終日は台風の影響もあったものの、元寇の史跡などを通して歴史のダイナミズムを感じる事ができた。特に、2日目の3人の先生方に講義いただけたことは、非常に勉強にもなり、とてもよい経験をさせていただけた。

フィールドワーク初日

■元寇資料館

モンゴルが来襲した「元寇」に関する資料館。2度にわたり計20万人弱の軍を動員した。

■筥崎宮(ハコザキグウ)

平安時代中期に、醍醐天皇が「敵国降伏」の宸筆を下賜され、筑前大分宮より遷座した。元寇により炎上した社殿の復興にあたり、亀山上皇も納められた。

この「敵国降伏」の意味とは、敵国を打ち負かすという意味ではなく、「敵国が我が国の優れた徳の力により、自ずから靡き、統一される」ことであり、武力により天下を統一する「降伏敵国」とは意味が異なる。この神社を訪れることにより、平安の時代から続く日本の思いに感銘を受けた。



元寇資料館にて
水盛先生撮影



筥崎宮「敵国降伏」の宸筆
水盛先生撮影

フィールドワーク2日目

九州大学伊都キャンパス講義

以下の3名から講義していただくことが出来た。

■九州大学 人文科学研究院 歴史学部門 朝鮮史学講座

森平 雅彦 教授

高麗史を中心にモンゴル帝国・元との関係について

■九州大学 比較社会文化研究院 社会情報部門 歴史資料情報講座

伊藤 幸司 准教授

日本の鎌倉・室町時代の国際貿易、特に福岡の役割について

■西南学院大学 国際文化学部

久芳 崇 講師

室町・戦国時代における中国および東アジア地域の武器、特に鉄砲(てつほう)について

フィールドワーク2日目

高麗を研究する意義とは、「大国」のパワーポリティクスに対する「小国のあり方、小国論」に関するものである。

大理やウイグルは、高麗と同じようにモンゴル帝国に組み込まれて行ったが、高麗とは異なり国家の枠組み自体がなくなってしまった。

また、博多から見たアジア、武器という観点からもお話いただいた。



バートル先生撮影

4. 研究計画

研究計画

文献研究とフィールドワークによる探究型学習により実施

2019年秋学期インターゼミ・アジアダイナミズム班 年間スケジュール

【メンバー】21名(うち教員3名) ①学部6名(杉浦、藤山、小出、和泉(遼)、押見、柳沢) ②院生8名(宮北、半田、越田、小西、北山、野々宮、山崎、浅賀)
 ③卒業生・修了生4名(光永・塚原・和泉(昌)、三好) ④教員3名(金先生・水盛先生・小林先生)
 【担当】リーダー(宮北)、副リーダー(半田、杉浦)、議事録: 輪番、スケジュール管理(宮北)

	月	日	議 題	文献調査	フィールドワークFW	備 考	議事録
1		13	初回学長講話				宮北
2	4月	20	自己紹介・班検討				宮北
3		27	テーマ方向性	次回ベース文献疑問など報告	FW訪問先決定		宮北
4		11	分担発表	次回ベース文献疑問など報告		年間スケジュール	宮北
5	5月	18	分担発表	文献集計・目次	FW訪問先決定		藤山
6		25	分担発表	文献集計・目次			小出
7		1	分担発表				和泉(遼)
8		8	◎研究計画中間発表1日目	研究テーマ、目的、問題意識、目次、文献、フィールドワーク	〇〇時集合		—
9	6月	15	◎研究計画中間発表2日目	研究テーマ、目的、問題意識、目次、文献、フィールドワーク	〇〇時集合		—
10		22	研究計画発表反省				柳沢
11		29	箱根合宿発表目次立て	中間発表に向けた討議			押見
12		6	分担発表				野々宮
13		13	分担発表				半田
14		20	箱根合宿発表PPT確認				山崎
	7月		7/31(水)-8/1(木) 夏合宿(箱根)中間発表 合宿先: 箱根水明荘(箱根町湯本 702) TEL.0460-85-5381(代) http://www.suimeisou.com/access/ index.htm	●発表者(役割分担): 1研究概要、2目次、3 内容、4参考文献・研究計画・FW (連絡: 学長室 高野takano@tama.ac.jp)			—
	8月						—
		下旬	8月26-28日 福岡フィールドワーク	福岡を中心に、九州大学など訪問			—

研究計画

15	9月	21				光永
16		28	分担発表	各執筆原稿の発表(状況報告)		杉浦
17		5	分担発表	各執筆原稿の発表(状況報告)		小西
18	10月	12	分担発表	各執筆原稿の発表(状況報告)		北山
19		19	分担発表	各執筆原稿の発表(状況報告)		塚原
20		26	分担発表	各執筆原稿の発表(状況報告)		和泉(昌)
21		2	PPT目次レビュー/分担確認	各自完成版を持ち寄る		宮北
		9	講義なし(学園祭)		多摩大学学祭	
22	11月	16	PPT目次レビュー/分担確認	全体を印刷して確認		半田
		23	講義なし			
23		30	PPTレビュー			柳沢
24		7	PPTレビュー			押見
25		14	アクティブラーニング(AL)祭	アクティブラーニング(AL)祭 (多摩キャンパス?)		
26	12月	21	論文発表			宮北
27		23	論文提出日		メールで送付する期限	
		5	講義なし(冬期休業日)			
28		11	2019年度最終講義			
29	1月	18	センター試験(講義なし)			
30		25	論文提出/懇親会(年度最終日)	最終論文(完成版)提出日		

授業回数 計30回(前期:14回 後期:13回)

5. 参考論文／文献

参考文献〈書籍〉

〈論文〉5本

1. 寺島実郎『大中華圏とモンゴル、その世界史へのインパクト』(『世界』第907号 (2018年5月号)、岩波書店,2018)
2. 岡田英弘『世界史の中の大清帝国』(岡田英弘編『清朝とは何か』,2009)
3. 金 貴東『歴史・文化・産業都市の開城』(日本貿易振興機構アジア経済研究所『アジア研ワールド・トレンド』第236号、特集「朝鮮半島の都市」,2015)
4. 佐立治人『元朝の立法・刑罰・裁判』(関西大学法学論集,2016)
5. みずほコーポレート銀行『Mizuho Industry Focus vol.89 純粋持ち株 会社体制におけるグループ経営上の落とし穴』(,2010)

〈著書〉77冊

1. 寺島実郎『寺島実郎の時代認識資料集 2019年夏号』(寺島実郎事務所,2019)
2. 寺島実郎・渡辺利夫・朱建栄『大中華圏—その実像と虚像』(岩波書店,2004)
3. 寺島実郎『大中華圏—ネットワーク型世界観から中国の本質に迫る』(NHK出版,2012)
4. 麻生川静男『本当に悲惨な朝鮮史』(KADOKAWA,2017)
5. 愛宕松男・寺田隆信『モンゴルと大明帝国』(講談社,1998)
6. 尹 龍嫻『韓国における最近の三別抄遺跡の調査と研究』(韓国研究センター一年報 第13号,2015)
7. 磯崎典世『韓国政治と日韓関係』(,2015)
8. 井上秀雄『古代朝鮮』(日本放送出版協会,1972)
9. 宇山卓栄『朝鮮属国史 中国が支配した2000年』(扶桑社,2018)
10. 岡洋樹、境田清隆、佐々木史郎編『東北アジア』(朝倉世界地理講座 第2巻,2009)
11. 岡洋樹『清代モンゴル盟旗制度の研究』(東洋書店,2007)
12. 岡田英弘『モンゴル帝国の興亡』(ちくま書房,2001)
13. 岡田英弘『世界史の誕生』(筑摩書房,1992)
14. 岡田英弘『世界史の誕生—モンゴルの発展と伝統』(ちくま文庫,1999)
15. 岡田英弘『読む年表 中国の歴史』(ワック,2015)
16. 岡本隆司『世界のなかの日清韓関係史 後輪と属国、自主と独立』(講談社,2008)
17. 岡本顕實『元寇：世界帝国が攻めてきた。国難。神風は吹いたか?』(さわらび社,2013)
18. 沖大幹他『SDGsの基礎』(事業構想大学出版部,2019)

参考文献〈書籍〉

19. 小長谷有紀 著『モンゴル』(『暮らしがわかるアジア読本』河出書房新社,1997)
20. 小長谷有紀『モンゴル草原の生活世界』(朝日新聞社,1996)
21. 小和田泰経『朝鮮王朝史』(新紀元社,2013)
22. 金岡秀郎『モンゴルを知るための60章』(「エアスタディーズ」第4巻、明石書店,2000)
23. 河上麻由子『古代日中関係史』(中央公論新社中公新書,2019)
24. 姜在彦『歴史物語 朝鮮半島』(朝日新聞出版、朝日選書,2012)
25. 関係を考える手がかりとして』(神戸大学会議発表論文,2004)
26. 高秉雲・鄭晋和共編『第3版『朝鮮史年表—前60万年—1991年12月まで』』(雄山閣出版,1992)
27. 高秉雲・鄭晋和共編『朝鮮史年表』(雄山閣出版,1979)
28. 国際時事アナリスト編『日本人のための朝鮮半島の歴史』(河出書房新社,2018)
29. 事業構想大学出版部『FACTFULNESS』(日経BP社,2019)
30. 芝山豊、岡田和行編『モンゴル文学への誘い』(明石書店,2003)
31. Jean-Paul ROUX(ルー)『Gengis Khan et l'Empire mongol. PARIS』(Gallimard,2002)
32. ジャン・ポール・ルー著 杉山正明訳『チンギス・カンとモンゴル帝国』(創元社,2003)
33. John Robert Seely『英国膨張史論』(平凡社,1930)
34. 白石典之『モンゴル帝国誕生—チンギス・カンの都を掘る』(講談社、講談社選書メチエ,2017)
35. 菅沼晃『モンゴル仏教紀行』(春秋社,2004)
36. 杉山正明・弓場紀知・宮紀子・宇野伸浩・赤坂恒明・四日市康博・橋本雄『モンゴル帝国』(『NHKスペシャル文明の道』第5巻、NHK出版,2004)
37. 杉山正明『クビライの挑戦』(講談社,2010)
38. 杉山正明『クビライの挑戦—モンゴルによる世界史の大転回』(講談社、講談社学術文庫,2010)
39. 杉山正明『クビライの挑戦—モンゴル海上帝国への道』(朝日新聞社、朝日選書,1995)
40. 杉山正明『モンゴル帝国と長いその後』(『興亡の世界史』第9巻、講談社,2008)
41. 杉山正明『モンゴル帝国の興亡<上>「軍事拡大の時代」』(講談社、講談社現代新書,1996)
42. 杉山正明『モンゴル帝国の興亡<下>「世界経営の時代」』(講談社、講談社現代新書,1996)
43. 杉山正明『ユーラシアの東西——中東・アフガニスタン・中国・ロシアそして日本』(日本経済新聞出版社,2010)
44. 杉山正明『興亡の世界史 モンゴル帝国と長いその後』(講談社,2016)
45. 杉山正明『大モンゴルの世界—陸と海の巨大帝国』(角川書店,1992)
46. 杉山正明『大モンゴルの世界—陸と海の巨大帝国 改訂版』(角川ソフィア文庫,2014)
47. 杉山正明『モンゴル帝国と長いその後』(講談社学術文庫,2016)
48. 杉山正明『耶律楚材とその時代』(白帝社,1996)
49. 杉山正明他『大モンゴルの時代』(中央公論社,1997)
50. 田村実造『中国文明の歴史<7>大モンゴル帝国』(中公文庫,2000)
51. 張東翼『モンゴル帝国期の北東アジア』(汲古書院,2016)

参考文献〈書籍〉

52. 鄭晋和『朝鮮史年表』(雄山閣,1992)
53. David O. MORGAN『The Mongols,Hoboken』(NEW JERSEY,2007)
54. デイヴィド・モーガン『モンゴル帝国の歴史』(角川選書,1993)
55. 東北亜歴史財団編、監訳者田中俊明、訳者篠原啓方『高句麗の政治と社会』(明石書店,2012)
56. 富谷至・森田憲司『概説中国史 下-近世-近現代』(昭和堂,2016)
57. ハイシツヒ著、田中克彦訳『モンゴルの歴史と文化』(岩波書店,2000)
58. 羽田正編『海から見た歴史』(東京大学出版会,2013)
59. 藤田昇、加藤聡史、草野栄一、寺田良介編著『モンゴル—草原生態系ネットワークの崩壊と再生』(京都大学学術出版会,2013)
60. 風戸真理『現代モンゴル遊牧民の民族誌—ポスト社会主義を生きる』(世界思想社,2009)
61. 松川 節『図説 モンゴル歴史紀行』(河出書房新社,1998)
62. 間野英二他『地域からの世界史—第6巻 内陸アジア—』(朝日新聞,1992)
63. 真野俊樹『こんな医者ならかかりたい—最高のかかりつけ医のを見つけ方』(朝日新聞出版、朝日新書,2015)
64. 水谷健彦『急成長企業を襲う7つの罠』((株)ディスカヴァー・トゥエンティワン,2014)
65. 宮脇淳子『モンゴルの歴史—遊牧民の誕生からモンゴル国まで』(刀水書房、刀水歴史全書、第59巻,2002)
66. 森平雅彦『モンゴル帝国の覇権と朝鮮半島』(株式会社山川出版社,2016)
67. 森平雅彦『モンゴル帝国の覇権と朝鮮半島』(「世界史リブレット」第99巻、山川出版社,2011)
68. 森平雅彦『モンゴル覇権下の高麗—帝国秩序と王国の対応—』(名古屋大学出版会,2013)
69. 山本光郎『耶律楚材と中書省について』(北海道教育大学、人文科学・社会科学編,2016)
70. 劉孝鐘(ユ・ヒョジョン)、ボルジギン・ブレンサイン『境界に生きるモンゴル世界—20世紀における民族と国家』(八月書館,2009)
71. 楊 海英『逆転の大中国史 ユーラシアの視点から』(文藝春秋,2016)
72. 李玉著、金容権訳『朝鮮史』(白水社,2008)
73. Robert O. Paxton 訳 渡辺和行、剣持久木『ヴィシー時代のフランス 対独協力と国民革命1940-1944』(柏書房,2004)
74. ロバート・マーシャル『図説 モンゴル帝国の戦い—騎馬民族の世界制覇—』(東洋書林,2001)
75. 早稲田大学モンゴル研究所『モンゴル史研究—現状と展望』(明石書店,2011)
76. 渡辺和行『ナチ占領下のフランス 沈黙・抵抗・協力』(講談社,1994)
77. Walther HEISSIG(ハイシツヒ)『Ein Volk sucht seine Geschichte : die Mongolen und die verlorenen Dokumente ihrer großen Zeit. Düsseldorf』(Econ Verlag,1964)

ご清聴ありがとうございました

高麗年表(918年～1235年)

高麗	中国・モンゴル帝国	日本
918年 王権 弓裔を殺し、高麗建国 935年 新羅を征服 936年 後百済を征服 983年 契丹、高麗を攻める 985年 契丹、高麗を攻める 1010年 第2次契丹(遼)の侵入 高麗軍は首都開城を明け渡す 1015年 遼の侵略 1018年 後渤海国滅亡 遼を一時撃退 1020年 高麗と遼の間に講和、朝貢 遼の分暦 1022年 契丹の正朔を奉じる。再び契丹に服属 1145年 朝鮮史書「三国史記」が完成 1218年 モンゴル帝国と同盟 1225年 鴨緑江事件 モンゴルと断交して対立する(→モンゴルの高麗侵攻) 1231年 蒙古(後の元)の侵入が始まる。(第1次高麗侵入) 1232年 蒙古軍第2次高麗侵入 1234年 蒙古軍第3次高麗侵入 1235年 蒙古軍第4次高麗侵入	946年 後晋、大契丹国により滅亡。開封にて国号を大遼に改める 1004年 澶淵の盟 1115年 金を建てる。 1125年 遼、金により滅亡 1126年 靖康の変で宋滅亡 1205年 チンギス・ハーンのモンゴル帝国、西夏に侵攻開始 1211年 モンゴル帝国、金に侵攻開始 1214年 金、モンゴル帝国の圧迫により中都(北京)から開封に遷都 1227年 西夏滅亡 チンギス・カン死去 1232年 三峰山の戦い 1234年 金滅亡	941年 天慶の乱 1017年 藤原道長太政大臣となる 1028年 平忠常の乱 1098年 源義家、昇殿を許される 1156年 保元の乱 1184年 源頼朝、鎌倉に公文所・問注所を置く 1192年 源頼朝、征夷大將軍に任ぜられ、鎌倉に幕府を開く(鎌倉幕府) 1221年 承久の乱 1232年 御成敗式目(貞永式目)を制定する

高麗年表(1238年～1392年)

高麗	中国・モンゴル帝国	日本
1238年 蒙古軍第5次高麗侵入 1247年 高麗、モンゴルへの貢納をやめる 1254年 蒙古軍第6次侵入 1258年 蒙古へ降伏 1259年 モンゴル(クビライ政権)に服属。 1270年 高麗「慈悲嶺」以北の広大な東寧路を奪われる。	1253年 雲南の大理国、モンゴル帝国に降伏 1257年 ベトナムの陳朝、モンゴル帝国に降伏 1271年 モンゴル帝国のクビライ、国号を大元に改める。首都大都 1274年 元、日本に遠征し失敗 1276年 元のバヤンにより南宋滅亡 1279年 崖山の戦い 1281年 元、再び日本に遠征し失敗 1282年 チャンパ王国、元に降伏 1284年 元、再びチャンパ王国に遠征。その後、チャンパ、陳朝連合軍の抵抗により敗退 1292年 シンガサリ王国に遠征 1294年 クビライ・ハン死去 1361年 朱元璋が南京で大明を建てる	1247年 宝治合戦 1268年 北条時宗が執権に就く 1274年 文永の役 1281年 弘安の役 1285年 霜月騒動 1290年 浅原事件 1293年 平禅門の乱。鎌倉大地震 1305年 嘉元の乱
1271年 忠烈王クビライの皇女、忽都魯揭里迷失(クツルク=ケルミシ)と婚姻の許諾を得る 1272年 忠烈王 クビライに日本侵略を提言。軍船の造船を申し出る 1274年 日本侵略のため、戦艦大小九百艘を造船する。		
1287年 元、高麗に征東行省を設立(後期征東行省)高麗王を長官に任命		
1297年 クビライの娘忽都魯揭里迷失死去。元との関係が壊れる		
1392年 高麗が減じる		